

「正」に廻るマゾヒズム世界

——谷崎文学の広がりと言話学の入口——

石 出 由 紀

一、「正」に廻る「筋」

「正」は面白い小説である。その面白さは、谷崎のいわゆる「筋」にある。

筋の面白さは、云ひ換へれば物の組み立て方、構造の面白さ、建築的美しさである。此れに芸術的価値がないとは云へない。(材料と組み立てとはまた自ら別問題だが)……凡そ文学に於いて構造的美観を最も多量に持ち得るものは小説であると私は信ずる。筋の面白さを除外するのは、小説と云ふ形式が持つ特権を捨て

ゝしまふのである。さうして日本の小説に最も欠けているところは、此の構成する力、いろ／＼入り組んだ話の筋を幾何学的に組み立てる才能、に在ると思ふ。⁽¹⁾

「筋の面白さ」について谷崎と芥川龍之介の間に有名な「論戦」が交わされたのは、「正」の執筆の直前である。

「論戦」のきっかけは、昭和二年の「新潮」二月号誌上の合評会で芥川が谷崎の「九月一日前後のこと」「日本に於けるクリツプン事件」を対象に「重大問題なんだが、谷崎君の読んで何時も此頃痛切に感ずるし、僕も昔書いた『藪の中』」なんかに就ても感ずるのだが話の筋といふものが芸術的なものかどうかと云ふ問題、純芸術的なものかど

うかと云ふことが、非常に疑問に思ふ」と発言したことにあった。谷崎は「改造」に連載中の「饒舌録」で、芥川は同じく「改造」に「文芸的な、余りに文芸的な」を連載して、この論戦は七月の芥川の自殺まで続いた。「饒舌録」は文芸時評として書きはじめたものだが、芥川の発言から、「筋の面白さ」「構造の面白さ」という論点を契機に、東西文学の比較、文学と歌舞伎、舞踊、文楽との比較などにわたって谷崎の芸術論を展開するものとなった。

この年（昭和二年）、谷崎はほとんど小説を書いていない。⁽²⁾伊藤整氏によれば、「創作を書かずにエッセイを書く時は多く作家の転換期に入ったことを示すものである。」⁽³⁾同氏は、その「新しい展開を示した作品としての『正』」を高く評価している。⁽⁴⁾

たしかに「正」は、「饒舌録」における「筋の面白さ」「構造の面白さ」の主張に呼応して、入念に構築された小説であり、「論戦」において芥川が自ら引き合いに出した「藪の中」の構成さえも意識の底に置かれていると考えられよう。「正」の「話」は、筋を追って二転、三転し、その「話」の逆転にともなう、次々に視点を変えた新しい「筋」が現れる。四人の主要登場人物それぞれの「筋」は、やがて

標題の「正」となって、からみ合い、巴に廻っていく。「話」の面白さは、「筋」と「筋の組み立て方、構造の面白さ」に広がっていく。

「話」の発端は、語り手の柿内園子と徳光光子の同性愛の噂であり、話は園子と光子の関係を中心に、園子の眼によって、園子の口から語られていく。しかし、二人の関係の間には実はその以前から綿貫栄次郎という光子の婚約者が介在していたことが「その十」で明らかにされると、園子と光子の関係には光子の視点から描いた「筋」があり、この関係の主導者が実は初めから光子であったことがわかってくる。噂を立てたのも、初めに語られた女子技芸学校の校長ではなく光子自身であったという、光子の「筋」による園子の「筋」の逆転が行われるのである（「その二十二」）。「その十」での綿貫の登場によって、園子、柿内孝太郎、光子、綿貫の四人のからんだ関係が一応は呈示されることになるが、そのからみ合いは全容をなかなか明らかにしない。綿貫の登場後、園子と柿内は夫婦の愛情を確認するが、光子の妊娠事件によってたちまち光子―園子との関係は回復する。それは綿貫の介在する関係としての回復であり、三者の関係を綿貫は、園子との姉弟の誓約書によって

確認、固定しようとする。ここで光子との関係について語る綿貫の話は、「その二十」～「その二十三」での光子の話によって完全に引っくり返される。綿貫は性的不能者であって、綿貫―光子の関係は正常の性愛ではないこと、妊娠は狂言だったことが明らかにされる。この逆転によって、綿貫の存在は一挙に重みを増し、綿貫―光子、光子―園子の関係における綿貫の意志の存在、綿貫の視点による「筋」が浮かび上がる。

綿貫―光子の関係は綿貫の不能を前提にした不安定な関係であり、つねに破綻を内在している。この不安定性はついに光子⇋園子の側からも、綿貫の側からも、三者の異常な関係に柿内を巻き込むこととなり、柿内が「恋」を知り、心中に進んでいく中で、柿内にとってもこの複雑な関係に対する独自の視点が生まれ、「筋」を構成することが可能になる。

「話」は、園子が作者に語り、作者が註を挿みながら進めていく。しかしその話の「筋」は、園子が時系列的に追っていく筋ばかりでなく、その筋をたえずひっくり返していく他の三人の視点からの「筋」も同時に存在する。芥川は「藪の中」でいくつかの「筋」を並列させて示したが、

「正」においてはそれぞれの「筋」が時に応じて自己を主張し、遠心力と求心力を示しながら、巴となってからみ合い、回転していくのである。そこにまず、「正」の建築的な構造の骨格を見ることができよう。

二、恋多き女の破局

このような構造の骨格は当然、四者四様の「筋」の主張を生み出す。園子の「筋」は、話を語り終えた園子の感慨としてこの構造における園子の存在の意義を主張する。

ひょっとしたら、生き残ったん偶然やないかも分れへん、死ぬまで二人に欺されてたのんやないやるか云ふ氣イしましたら、……折角死んでも彼の世で邪魔にしろれるのんやないかと、あゝ、……その疑ひさいなかつたら、……さうかて死んでもた人恨んだとこで仕方あれしませんし、今でも光子さんのこと考へたら「憎い」「口惜しい」思ふより恋しいて／＼、……（その三十三）

この園子の嘆きは、園子の「筋」の構成が光子との同性愛のみをめぐって構築されていることを示している。それ

にもかかわらず園子は語り手であり、したがって「話」はこの光子―園子の関係を軸に語られる。この「筋」からは全体の梗概をまとめることさえ可能である。

園子は、「作者註、……その異常なる経験の後にも割に甞れた痕がなく、服装も態度も一年前と同様に派手できらびやかに、未亡人と云ふよりは令嬢の如くに見える典型的な関西式の若奥様……」（「その一」）として設定されている。夫、柿内とは、実家がその秀才ぶりを見込んで財産も分け、勉強も洋行もさせようとして結婚している。柿内は「キチン屋のガリガリ屋」（「その八」）で、「どうも性質が合ひませんし、それに何処か生理的にも違うてると見えまして、結婚してからほんとに楽しい夫婦生活を味はうたことはありませんだ」（「その七」）という状態であった。このように夫に不満のある有閑マダム、園子は、この話の少し前にも恋愛事件を起しており、恋やつれも見せぬ多情な女である。有閑マダムの学校「女子技芸学校」での光子との接近は、園子にとって当然の事件であった。

「シーツの破れ目から堆く盛り上つた肩の肉が白い肌をのぞかせてるのを見ますと、いつそ残酷に引きちぎつてやりたうなつて、夢中で飛びついて荒々しうシーツ剥がしま

した。……『あゝ、憎たらしい、こんな綺麗な体してゝ！う、あゝ、あなた殺してやりたい』（「その六」）と始まる同性愛によつて、夫婦関係は破綻し（「その八」）、園子は光子への「情熱の奴隷」（「その九」）となる。

しかしこの関係（園子の「筋」の主張）は、たえず光子と綿貫によつて逆転される。着物を盗まれたという事件で光子に呼び出された園子は綿貫という婚約者の存在を知り、裏切られた思いで夫とよりを戻す（「その十」その十二）。ところが「やうやう幾分か落ち着いて来ましたん」と思つたのも束の間、光子の妊娠で、「だん／＼私は抜き差しならん深みい陥まつて行き」、自分から始めたつもり同性的愛が、「女で女を迷はす」、「私の愛を自分の方い奪ひなざる」という光子主導のものであったこと、しかも「光子さん自身の心は綿貫の方い吸ひ取られてたこと」を思い知らされる（「その十六」）。婚約も実は不毛の関係で、妊娠は狂言だった（「その二十」）。

園子は綿貫との姉弟の契約、綿貫と柿内の夫婦関係維持の契約による束縛を逃れて光子との関係を維持しようとして、光子と偽装心中を計画する。しかし、睡眠薬の眠りから醒めた時、この計画は覆つて、綿貫に代わつて夫の柿内が光

子の恋のとりことなっている。綿貫を放り出した光子が、今度は園子と柿内を思いのままに支配する自らの王国を形成するのである（その二十九～三十三）。

カストロフは、綿貫の「筋」によってすべてが覆えられて訪れる。綿貫が自らを含めて四人の異常性愛を世間的に公表する筈に出たため、光子の愛欲の王国は瞬時に崩壊し、三人は睹わず心中を図るが、ここでも園子は死に遅れ、園子の「筋」の主張はついに受け入れられるところとならない（その三十三）。

園子は、多情で、行動的な女である。園子は「パッション」を基準とし、見通しも企みもなく、光子との愛の運命に従順に行動する。園子の「筋」が光子と綿貫に翻弄されつづけ、綿貫の「筋」の帰結である破滅の世の渦中に巻き込まれるのは自然の運命であり、かつまたその渦の底におちいるうとしてひとり生の涯に浮かび上がって来るのも自然の運命である。

三、恋愛の天才と狂気

光子にとってはすべては綿貫から始まっている。光子は

船場の羅紗問屋のお嬢さんで、「作者註」によれば「大阪の町娘の姿のうちにも、その眼が非常に情熱的で、潤はひに富んでいる。一口口に云へば、恋愛の天才家と云つたやうな気魄に充ちた、魅力のある眼つきである」（その二）。このような背景と素質の光子を引っかけた綿貫は性不能者でありながら、「同性愛の習慣あつた」くろ、との女に「一人前の男やなうても女に愛される云ふこと」を教え込まれ、「くろ、との女でも一べん綿貫に引つかうたら大概なもん夢中になる」ほどの技巧を身につけている。こういう綿貫を光子は、「会うたあとでは……もう／＼止めてしまひたい思いなさるのんですけど、そら不思議と、又二三日も立つうちに自分の方から跡追ひ廻すやうになつてしまふ」という関係を結んでいる（その二十一、二十二）。こうして光子は、「同性愛の女から女に愛されることを教え込まれた中性の男」綿貫の教育を受け、そのような男を愛した女として、園子との同性愛を作り上げていく。それはまさに綿貫の教育の再生産にほかならない。園子との関係は「利用する心持」から始まって「ほんまの愛情」に変わり、園子の崇拜を得て光子は「持ち前の優越な感じ——自尊心」を綿貫との関係においても取り戻すのである（その二十二）。

恋愛の天才家、光子は、園子との関係をきつかけに、四人のからみ合いの中で自己の性を昂揚させ、発展させていく。光子はこうして綿貫にとってはずねに揺れ動く存在となり、綿貫が自己の理想の位置に光子をつなぎ止めようとする計略や契約をたえず乗り越えていく。ついには園子との狂言心中を利用して柿内を「知らず識らず、氣い付いた時にはもうどうなにしても逃げることの出来んやうにし」て、愛のとりこにしてしまう（その三十）。光子は園子と柿内の崇拜を一身に集め、綿貫を除外した自らの愛の王国を作り上げる。

光子はこの小説の中でつねに事件の中心にいて、光子の視点からは、あるいは「痴人の愛」のナオミを崇拜、憧憬したナオミストの読者の眼には、正は光子を中心に廻っていくように見える。光子は綿貫に教育されたナオミでありながら、園子を同性愛者として教育し、正常人柿内を自己の崇拜者に教育し、綿貫をはじき出す遠心力を示す。しかしこのような光子の「筋」の主張は、綿貫の意志によって二重の逆転に遭遇する。光子は「綿貫の怨念祟つたみたい」な荒んだ女王として君臨するのであり、柿内は「第二の綿貫」に変貌する。光子の王国は綿貫の意志の支配を免

れず、しかも証文がらみのオドシのとおり綿貫の不利な事実を含めて四人の正巴の性愛が新聞に暴露されて、光子の「筋」は破局を迎える。

四、正常人と異常性愛

ナオミストの眼にはおそらく、柿内は光子の王国における譲治と映じよう。しかし柿内は、光子にとらえられ、愛を教えられる存在である。光子の崇拜者としての柿内の登場はあまりにもあわただしく、はかない。光子―柿内の関係は柿内の生涯の主軸となっていないのである。

あまりにも正常な柿内は、多情な妻の園子にも、その愛人の光子にも、終始振り回される無力な存在である。光子―園子、綿貫―光子という正常ならざる性愛の側から見れば、正常人柿内は付随的な道具立てにすぎない。しかし柿内の存在は、異常な性愛に対する正常な人間の関係を示唆して、「正」一篇の構造における不可欠の視点を呈示している。柿内は、正常人として妻の園子を愛している。その愛にもとづいて光子との異常な関係を怒り、「今後交際せんとしてくれ」と頼んだり（その八）、綿貫に乱れた関

係の全容を知らされると綿貫に嫌悪を感じながらも、妻を監督する証文を書いたり、「これなら女に好かれる筈ない」と奇妙な安堵を感じたりする（その二十六）。

そのような正常人が光子にかかってたちまち異常性愛のとりこになる柿内の「筋」は、「恋するもんの心を知った」（その三十一）がゆえに破滅の道を歩むという谷崎の典型的なテーマを追っている。柿内の「筋」の主張にとって重要なのは、異常性愛に対して柿内が正常だったことなのであり、その柿内がひとたび光子の愛に溺れて生じる逆転は、それ以前の柿内が愛の世界に疎遠であればあるほど純粹で劇的なものとなる。「僕等死んだら、此の観音様『光子観音』云ふ名アつけて、みんなして拜んでくれたら浮かばれるやろ」（その三十三）と大真面目に柿内が言うおかしみは、「正」の構造における柿内の「筋」の位置を象徴している。それは、多情な女であるが故に破局の道を進る園子の筋とも、綿貫の契約の世界（後述）を逃れて自らの王国を築いたが故に契約の罰として死を選ぶ光子の筋とも位置を異にする。まして後述のようにマゾヒストたるべきことを運命づけられた綿貫の破滅への道とは、まさに対極の位置にある。

五、「正」を廻らす性不能者の「意志」

綿貫の「筋」の主張は、正を巴に廻らす原動力となっている。綿貫は、「その十」で光子の婚約者としてはじめて登場し、章を追うことにしだいに姿を現していくが、ついにその全容を明らかにすることはない。しかし綿貫の影は、以後、最後の心中事件にいたるまで、からまり合う三人の姿に投影されつづけるのである。

「話」の中軸をなす光子―園子の関係は、当初から綿貫―光子の関係の投影にほかならず、また綿貫は、全篇にわたって陰の狂言作者をつとめている。綿貫の仕組んだ狂言は、綿貫―光子の関係の不毛性と不安定性から生まれる。それは、期待を常に裏切ろうとする現実を自己の欲望の枠の中に維持しようとする綿貫の努力にほかならない。

性不能者で、「同性愛のくるとの女」から性の技巧を教え込まれた男であり、その技巧によって光子をとらえている、というのが、「その二十一、二十二」で語られる綿貫の設定である。この背景を知ると、光子の陰にはつねに綿貫がいたことがわかる。そもそも光子が技芸学校に行った

のは「綿貫と会ふ機会作るため」だったし、同性愛の噂は綿貫との関係を維持するためのものだった。

しかし光子は、綿貫との関係においては揺れ動く存在である。光子の「筋」の主張が光子の自我の発展であるとすれば、綿貫の「筋」の主張は、揺れ動く光子を自己の世界の中に宙吊りの状態でつなぎ止めようとする行為である。

「利用する」つもり同性愛の噂を実際の性愛に高めてしまふ光子を、綿貫はまず、旅館で着物を盗まれるという事件で光子の婚約者として園子の前に現れ、二人の仲を割こうとする。光子が妊娠の計略で園子とよりを戻すと、今度はその計略に便乗しつつ、園子との姉弟の契約によって三者の共存の関係の中に綿貫—光子の関係を維持しようとする。光子が園子との関係によって「優越の感じ——自尊心」を發展させ、自ら築いた園子との関係を綿貫との関係に優先させる覚悟を決めると、綿貫は柿内に夫婦関係の維持の契約を持ちかけて現状維持を図る。

この執拗な努力も、ついに光子をつなぎ止めることはできない。光子は、園子との偽装心中の中で柿内を自らの愛の王国にとり込むことによって、綿貫の企図をすべて破綻させてしまふ。こうして綿貫は、自らの契約に従って自分

の恥を含むすべてを社会的に暴露し、破滅の道を選ぶのである。

この「筋」の中で綿貫は、まず光子と一体化した存在であり、光子を通じて園子にも柿内にも実現される陰の存在である。綿貫が破滅を選んだとき、表裏の存在である光子も契約による懲罰として直ちに園子と柿内を従えた死を選ぶ。共に死のうとする園子も柿内も、このカタストロフに綿貫の意志が貫かれていることを実感している。卅の世界は綿貫の世界として終局を迎えるのである。

六、マゾヒズム世界の「卅」——神話学の入口

「筋」の分析から浮かび上がってくる全体の構造は、表面の軸、光子—園子に対する裏面の軸、綿貫—光子の存在であり、これが卅に廻るとき、前者はつねに後者を出し抜き、優越を装いながらも、ついに後者の支配を逃れられない関係としてとらえられる。この構造の中にこそ、「卅」の「面白さ」、テーマがある。

「筋」はもちろん、語り手園子の言葉と韜晦的な「作者

註」によって語られる。「筋」は四者四様であり、その「敷の中」はさまざまに読み込み方を予定している。「正」を最初に高く評価した伊藤整氏は、園子を女主人公ととらえ、「二人の後を追って自殺したいと思いつながらも、夫と徳光子とが死後の世界で自分を邪魔にするのではないかと考えると、その自殺もできない、という本当の絶望に追い込まれる」⁽⁷⁾「園子の悲しみ」⁽⁸⁾を中心に据え、「このようなセックスと人間エゴとの結びつきの中には、窮極の救いがないこと、神、または道徳的戒律なしには、人間は調和ある生活を作り出すことが出来ないのではないか、という思想が暗示されている、と言ってもいいだろう」⁽⁹⁾と、園子の「筋」を読み解いた。

野口武彦氏は、三島由紀夫が指摘した「正」(まんじ)におけるレスビアニズムという、男性の自意識を全く免れた世界⁽¹⁰⁾に着目し、「男性の意識が関与することの許されぬレスビアニズムの世界で、女性が女性自身を超越化することが可能かという問題が『正』一篇の主題なのである」⁽¹¹⁾と、光子―園子の関係における光子の視点を分析した。この視点から見るカストロフは、園子と柿内を脇仏に従えて光彩陸離と燃え尽きる観音仏として光子を浮かび上がら

せる。

河野多恵子氏は、「正」を「痴人の愛」の肉体的マゾヒズムから心理的マゾヒズムへの転換ととらえ、作者の分身を「心理的マゾヒスト」柿内に見て、「正」におけるマゾヒズム状況が柿内の位置をさまざまに移動させることに注目する。「作者の分身が柿内なのか、柿内の分身が作者なのかと疑問が起こるほど」⁽¹²⁾と、作者谷崎の創作過程の分析からとらえられるマゾヒズムの視点がめまぐるしく廻っていくことを、河野氏は指摘する。「谷崎はこの作品で余程、男性の心理的マゾヒズムを描きたかったのであろう。柿内のために、光子と綿貫の関係を、描きすぎて自縄自縛になるほどまでに描いているのだから。」と、谷崎の「多くの試みと迷い」⁽¹³⁾に共感を寄せつつ、河野氏は、「正」を「偉大な失敗作」⁽¹⁴⁾と規定する。

しかし、河野氏も指摘するように、「夫婦して彼等〔光子と綿貫〕に振りまわされ、柿内は心理的マゾヒズムに与れるようになる。が、彼等に振りまわしてもらえる機会も多くは、肉体的欠陥があるために光子を様々に必要として画策する綿貫の手練手管が基本になっている」⁽¹⁵⁾。このような構成から綿貫の存在を重視したのは平野謙氏であって、

先に呈示した構造の全体性の中にテーマをとらえようとすれば、同氏の次の評価は注目に値する。

綿貫という変質者こそ本篇のかくれた主人公であり、……証文の書きぶりや……交渉する話ぶりのうちにあらわされている、ほとんど正視しがたいほどの濃密なリアリティほど、性による人間性の変質と崩壊を如実に示しているものはない、と思う。

綿貫を中心とする登場人物相互のぬきさしならぬ組合せは、性の破壊作用がいかに人間の深部にまでとどくか、を物語る冷酷非情な作者の人間認識の実体にはかならない。ここに小説をとおして表現された思想の力が泛びあがっている。⁽¹⁷⁾

本質的に冷酷で、破壊にしかたどりつかないマゾヒズムは、この思想を語るにふさわしい。綿貫の構築する世界には、そのマゾヒズムの本質的な傾向が色濃く現れている。

マゾヒズムとはもちろん、サディストとマゾヒストの遭遇ではない。マゾヒストが「いためつけてくれ」というとサディストが「ごめんこうむる」と答える笑い話を、ジル・ドゥルーズは「ことのほか愚かしい」と書いている。

「マゾヒズムにみられる女性の拷問者はサディストたりえ

ないが、それは彼女がマゾヒズムの内部にいるからであり、マゾヒズムの状況に必要不可欠なものとしてあるからだということ、すなわち、女性の拷問者がマゾヒズムの幻影によつて実現された一要素にはかならないからだという事実⁽¹⁸⁾」を、ジル・ドゥルーズは、等閑視された明白な事実として呈示する。

谷崎自身も「クラフト・エビングに依つて『マゾヒスト』と名づけられた一種の変態性欲者は、云ふ迄もなく異性に虐待されることに快感を覚える人々である」と、クラフト・エビングの定義⁽¹⁹⁾を援用しつつ、こう述べている。

マゾヒストは女性に虐待されることを喜ぶけれども、その喜びは何処までも肉体的、官能的のものであつて、毫末も精神的の要素を含まない。人或は云はん、ではマゾヒストは単に心で軽蔑され、翻弄されただけでは快感を覚ええないの乎。手を以て打たれ、足を蹴られなければ嬉しくないの乎と。それは勿論さうとは限らない。しかしながら、心で軽蔑されると云つても、実のところはさう云ふ關係を仮りに拵へ、恰もそれを事実である如く空想して喜ぶのであつて、云ひ換へれば一種の芝居、狂言にすぎない。……つまり

マゾヒストは、実際に女の奴隷になるのでなく、さう見えるのを喜ぶのである。見える以上に、ほんたうに奴隷にされたらば、彼等は迷惑するのである。⁽²⁾

谷崎がこのような規定、あるいはクラフト・エビングの症例研究、さらにはマゾッホの小説によってマゾヒズムを限定し、その枠の中でマゾヒズム小説を展開しようとしたとは考えられないとしても、谷崎の小説に現れるマゾヒズムを理解しようとするとき、これらのものは有力な手がかりとなる。ジル・ドゥルーズはマゾッホの小説を多面的な角度から読み込み、いわばマゾッホの神話学を読み解こうとするが、谷崎の小説の神話学のためにもこの試みは有益な示唆を多く与えてくれる。

綿貫の執拗な努力は、自己の描く幻影の中に光子を実現する努力であり、光子は綿貫に教育され、感化されて変身しつづける。マゾヒズムの幻影の実現のためには、「女の拷問者」にそなわっている一定の「性質」を「マゾヒストは調教し、訓育し、内奥に深く隠されたおのれの企てに従って説明しなければならず、またその企ては、サディストの女性との遭遇によって、ことごとく失敗に帰してしまふにちがいないものなのだ」と、ジル・ドゥルーズは言う。

綿貫—光子の愛の形態は、小説の表面に描き出されてはおらず、わずかに最後の章で、(柿内が綿貫と)「魂入れ替つたやうに、女みたいなイヤ味云うたり邪推したりして、……光子さんの御気嫌取つたりしますのんで、そんな時の物の云ひ方や表情のしかたや、陰険らしい卑屈な態度じつと見てましたら、声音から眼つきまで」と綿貫生き写しになつてゐるやあれませんか」と、「前から光子さんにあつた」「自分がどのくらゐ崇拜しられてるか試してみてもそれ愉快がるやうな心理」が綿貫の「感化」によって「誰掴まへても綿貫と同じやうにさしたかつたのんやないか」というところまで発展し、光子—柿内の関係に綿貫—光子の関係が倒置的に再生産されるにいたつた状況が描かれるにとどまつている。そこに投射されているのは綿貫の影であり、マゾヒスト綿貫の意志である。しかし、「筋」の分析においてすでに綿貫—光子の関係の成立と変化の過程を見、その過程にからまり合う各者の関係を見たところから、綿貫—光子の関係は綿貫を教育者とするマゾヒズムの状況にあることが明らかに示唆される。それは、光子にもともとあった恋愛の天才家としての性質、崇拜を喜び、優越の感じを表す資質が綿貫の調教、訓育、内奥の企てに従わせる説得の

結果として開花した状況である。

このマゾヒズム状況の主宰者綿貫は、性的不能者であり、女のくるとの同性愛者によって性欲を開発されたという設定である。クラフト・エビングの症例のほとんどは、正常な関係においては性的に不能なマゾヒストであり、それゆえにこそ「性的精神病」⁽²³⁾の対象として扱われている。

クラフト・エビング以後、フロイトは、性倒錯を小児期の性理論、とくにエディプス・コンプレクスと去勢コンプレクスの克服不全と関連づけて解釈する。⁽²⁴⁾要するに、小児期の性理論を脱却できないために、正常な関係においては性欲を満たすことができず、性目標ないし性対象を倒錯させて性欲を実現するのが倒錯者だというのである。つまり、クラフト・エビングの症例においても、フロイトの症例においても、マゾヒストは正常な性関係においては心理的不能者なのである。

綿貫の肉体的性不能という設定は、マゾヒストたるべき契機をさらにのっぴきならないところまで押し進める。フロイトのいう小児期の性愛、口唇的性愛は、女性の同性愛者によっておそらく極限まで高められたであろう。ジル・ドゥルーズは、フロイトの理論の中の否認の契機に着目す

る。エディプス・コンプレクスは口唇的性愛の対象である母親を攻撃する父親の否認であり、去勢コンプレクスは自らの内にある父親の否認である。綿貫のような肉体的性不能者にとつては、女性はまず口唇的愛の対象、すなわちジル・ドゥルーズのいう口唇的母亲であり、不能は自らの内の父親の決定的否認にほかならない。それは口唇的母亲をエディプスの母親に、すなわち自らの去勢者に転移していく契機に通じる。フロイトはマゾヒズムをサディズムに比して正常な性目標から遠く離れているとして、性目標の倒錯（バーヴアージオン）によって特徴づけるが、そのバーヴアージオンを「普通ならば究極の目標にむかってまっしぐらに通じ抜けられてしまう筈の性対象に対して、中途半端な関係のままに停滞すること」と定義を与えている。⁽²⁵⁾対象に対する未決定の宙吊り状態こそ、マゾッホの美学の特徴としてジル・ドゥルーズが抽出したものであるが、綿貫の性不能は、絶対的な宙吊り状態を運命づけるものにはかならない。

綿貫に性愛を教えた「同性愛のくるとの女」とは、いわばマゾヒスト綿貫を生み出したジル・ドゥルーズのいう「原始の子宮的母亲」であり、それは綿貫が執拗に幻影の

中に実現しようとする口唇的母親としての光子に転移している。すなわち光子は、娼婦的に(「恋愛の天才家」として)、同性愛にとらえられた園子を生み出すのである。こうして綿貫は、理想の良き母親、口唇的母親としての光子を取り戻すために契約に頼らなければならない。契約は、ジル・ドゥルーズによれば「マゾッホの現実体験においてもその小説中にあっても、マゾッホという特殊ケースにあってもマゾヒズム一般の構造においても、恋愛の理想的形態として」現れる重要な因子である。それは、「犠牲者となるものの同意の必要性ばかりでなく、説得の資質、教育的かつ法律学的な努力をも表現するものであり、その資質と努力を通じて、犠牲者は自分の拷問者を訓練するのである」⁽²⁶⁾。

クラフト・エビングの著書に収録されているマゾッホの契約⁽²⁷⁾やマゾッホの「毛皮のヴィナス」に書かれている契約⁽²⁸⁾のような綿貫と光子の契約書は「正」においては呈示されていないが、綿貫は光子の婚約者として登場し、不能者でありながら説得によって婚約という契約状態を維持しつづける。「その二十九」で綿貫と光子が「喧嘩別れ」する描写でも、綿貫は「永久に一心同体やとか、死を以て綿貫に従はないか」とか、その約束に背いたら此ない／＼にしら

れるやとか」書いてある証文を持ち出して、光子に「あんたみたいに何ぞ云うたら証文書け／＼云ふ人あれへん」と拒絶されるが、その前にも「法律くさい文句並べるのんがああ男の癖」(「その二十四」)と、契約への固執が示唆されている。先行する「痴人の愛」ではこのような契約状態はもつとはつきりしていて、笠原伸夫氏はこの小説の構造を譲治とナオミの二つの契約を焦点とする楕円の空間として分析している⁽²⁹⁾。

しかし、「つべこべつべこべ果てしない」理屈で「自分の方から跡追ひ廻す」状態に光子をつなぎとめるための契約であっても、マゾヒストの契約は隷属を容認する契約であり、主人による契約の破棄、名義書き換え、という逆転を内在し、しかも奴隷として死ぬべき意図と主人の特権を奴隷が付与するという、逆説に満ちた契約である。事実、綿貫の契約はすべて光子によって破棄され(「その二十九」での証文の拒否)、名義を書き換えられ(光子は綿貫を捨て園子と柿内を奴隷とする)、綿貫は自ら死に等しい懲罰(自らの恥を世間にさらし出す)を選び、主人の特権を剝奪する(光子を死に追い込む)。これは綿貫の教育の失敗であるが、一方、契約という愛の形態そのものに必然的に内在する破局

でもある。

マゾヒスト綿貫は不能者であり、去勢という懲罰を受けている存在であるから、契約における主人、光子はすでに冷酷なエディプスの母親に転移している。子宮的母親とエディプスの母親を吸収したその中間の口唇的母親というマゾヒストの幻影の中の理想像は、契約そのもののうちに崩れ去る宿命を秘めているのである。エディプスの母親とは愛を与える女である。光子は綿貫に愛を与え、園子に愛を与え、柿内に愛を与える。そして契約は、つねに光子を主人として規定するものであり、すなわちジル・ドゥルーズの神話学によれば、母親に家長的な父権を与えて、母親が父親を抹殺すると同時に、父親でないのではないという二重の否認を体現する。つまりマゾヒストの契約は、専制的な母親によるアマゾン社会の墮落形態、ディオニソス的な形態として出現する。⁽³⁰⁾それは「毛皮のヴィナス」で契約が持ち出されて以後ワンダがくり広げる饗宴とも、「痴人の愛」でナオミの「第二の契約」以後の饗宴とも照応する。光子の地位はこの場合、同性愛の相手園子の存在によってさらに強化される。園子は恋多き女であり、ジル・ドゥルーズの神話学でいう原始の子宮的母親であるから、光子はその

子宮的母親を犠牲として吸収し、同時に父権的な専制者として君臨する。

マゾヒストが虐待を被ることによって得るものは、性的快楽の期待であり、幻影である。したがってマゾヒストの苦痛は、そのまま快楽ではなく、快楽の到来を最大限に引き延ばす行為であり、その未決定の宙吊り状態の中に理想の幻影を作り出す快楽である。マゾヒストは性的快楽の到来を期待の中に、幻影の中にとどめようとして中性化する。「正」の綿貫は、肉体的性不能者として、「中性の」「男女」「女男」(「その二十一」)、つまりジル・ドゥルーズが抽出するマゾヒストの本質としての雌雄同体の存在であることを運命づけられている。愛を与えて回る光子を自らの幻影の中に維持しようとする綿貫の努力は必死であり、この契約の努力によって、逆に園子も、柿内も、光子の専制的な支配にとらえられていく。

「自分がどのくらい崇拜しられてるか試してみてもそれ愉快がるやうな心理、前から光子さんにあつたことはありましたものの、そない極端に、ヒステリーみたいなこと云ひ出しなかつたのんは、何ぞ別に理由あるのんに違ひないのんで、多分綿貫の感化やないか思ひますねん」(「その三十三」)

と、いみじくも園子は語る。教育は失敗し、幻影の中の宙吊りを維持できなくなったとき、光子はエディプス的な母親に転移し、サディスト的な両性具有の専制者となっている。肉体的性不能者の綿貫にとって、「毛皮のヴィナス」のセヴェリンのように「鉄床」から「槌」に反転することはできない。綿貫は、理想の女性である口唇的な母親の残酷な死のイメージを追って、自らの秘密を曝らしつつ、カタストロフを準備し、マゾヒストの意図を貫き通すのである。

光子は綿貫を拒否すると、園子と心中を偽装し、柿内を征服して愛の奴隷とする。光子は、園子と柿内を意のままに従える専制的な女帝となり、自らの愛の王国を作り上げる。光子はすでに、綿貫の意図によるマゾヒズム状況から逃れて、マゾヒズムの対象的要素から、自らの状況を支配するサディストに反転している。つまり、綿貫の作り出す状況が教育と契約による自我の意図的規定であったのに対して、光子の状況は超自我による園子と柿内の自我の抹殺である。それにもかかわらず、園子も柿内も、光子のサディストぶりの陰に綿貫の意図を見ている。

何や光子さんの様子云うたら、綿貫の怨念祟つて

みたいに日増しに荒んで来なさつて、ぞうッと身の毛のよだつやうなことがあります(『その三十三』)。

光子は「恋愛の天才家」であつたし、崇拜されることを喜び、プライドに充ち、高慢で、「優越の感じ——自尊心」を持ち前としていた。それは綿貫のマゾヒズム状況における一要素としてのまたとない素質にはかならない。光子はその綿貫の感化によって変化を続け、園子を「情熱の奴隷」としてからは、「綿貫のたくらんだことあべこべに引っくり覆して見せつけてやる」(『その二十三』)という氣にまでなっている。「毛皮のヴィナス」のワンダは行き過ぎることの予覚どおりにサディストに反転していくが、綿貫の感化が綿貫の期待を越えて進み、綿貫の企図の逆転が正の状況の破局をもたらすことは、園子に「予覚」されている(『その二十四』)。光子は、綿貫の企図を逆転したとき、柿内までを「情熱の奴隷」と化し、綿貫の干渉を排除して、サディストの「女王」に反転する。光子は綿貫の教育を越えたが、光子の王国は綿貫の「怨霊」に取り付かれ、綿貫の意図が投影された、綿貫の世界の反転にはかならなかった。光子はなおも綿貫の意図の支配を受け、綿貫の罪状曝露によって直ちに「『死』の云ひ出し」て、破滅の懲

罰を選ばなければならなかったのである。

注

- (1) 「饒舌録」、「改造」昭和二年三月号、『全集』第二十卷、中央公論社。
- (2) わずかに、ともに未完に終わった「ドリス」「顕現」の連載小説二本がある。
- (3) 『現代日本小説大系』第二七卷解説。『作家論』筑摩書房、昭和三十六年。
- (4) 同。
- (5) 『全集』第十一卷。
- (6) 「正」では性の倫理感の崩壊によって人間が減びて行くことが描かれている。善良な男であつた柿内という男は別個な女性の内に力を見出したために減び……伊藤整、前出。
- (7) 『全集』解説。
- (8) 『現代日本小説大系』前出解説。
- (9) 『全集』解説。
- (10) 三島由紀夫「谷崎潤一郎」、『作家論』中央公論社、昭和四十五年。
- (11) 野口武彦「谷崎潤一郎論」中央公論社、昭和四十八年。
- (12) 河野多恵子「『正』について」、『谷崎文学と肯定の欲望』文藝春秋社、昭和五十一年。
- (13) 同。
- (14) 同。
- (15) 河野多恵子「悪魔と墓」前掲書。
- (16) 河野多恵子「『正』について」前掲書。
- (17) 『平野謙作家論集』昭和四十六年、新潮社。
- (18) ジル・ドゥルーズ『マソッホとサド』一九六七年、蓮見重彦訳、晶文社。
- (19) 「日本に於けるクリップン事件」『全集』第十一卷。
- (20) 「相手から虐待されることをよるこび、いつまでも相手の暴行に服従し、それが淫好のきっかけとなる。このような個人的な淫好状態を実現するために、強力な感動から発した要求が生じるのである。」R・クラフト・エビング『変態性欲心理学』一八八六年、平野威馬雄訳、一九五六年、河出書房。
- (21) 「日本に於けるクリップン事件」前出。
- (22) ジル・ドゥルーズ前掲書。
- (23) 『変態性欲心理学』の原題は *Psychopathia Sexualis* といふ。医学用語では性的精神病、または性欲錯倒症。
- (24) フロイト「性欲論三篇」『フロイト著作集5』懸田克明、

他訳、人文書院、一九六九年。

(25) 同。

(26) ジル・ドゥルーズ前掲書。

(27) クラフト・エビング前掲書は抄訳であり、その契約書を収録していない。ジル・ドゥルーズ前掲書により、モール改版の仏訳本から再録したものを参照。

(28) ザッヘル・マゾッホ『毛皮のヴィナス』一八七〇年、伊藤守男訳、二見書房、昭和四十三年。なお、マゾッホと谷崎を直接結びつけられる資料はなさそうだが、クラフト・エビングの原書の刊行年一八八六年にはマゾッホはフランスでレジョン・ド・ヌール勲章を受けたほどの国際的大流行作家であったし、一九二八年にはこの小説の英訳本が刊行され、佐藤春夫はこれを底本に戦後翻訳書を講談社から出している。少なくともクラフト・エビングその他の紹介から「毛皮のヴィナス」の梗概程度は知っていたと考えていいかも知れない。

(29) 笠原伸夫『谷崎潤一郎——宿命のエロス』冬樹社、昭和五十五年。

(30) ジル・ドゥルーズ前掲書。